

戦時下の学童集団疎開

ある疎開先の1日の計画表

20時00分	18時00分	17時30分	16時00分	13時00分	12時00分	11時30分	8時30分	50分	7時30分	6時30分
就寝	整理反省自習	夕食	入浴 自由時間 自習遊び体操	登校授業	昼食	体操	自習、作業または寮舎授業	朝食	礼拝 宮城遥拝御歌奉謡	起床 乾布摩擦健康調査清掃

いつ終わるのか
分らない生活が続く

昭和19（1944）年には、戦局が悪化していきます。アメリカ軍の本土空襲が本格化すると考えた国は、子どもたちを守るために学童疎開を実施することを決定しました。

神奈川県内で集団疎開の対象となったのは、横浜、川崎、横須賀の国民学校3～6年生のうち、縁故疎開※ができない約4万人の子どもたちでした。

※ 地方の親戚や知人を頼った疎開

当初予定された疎開先は静岡県でしたが、近藤知事は子どもたちの負担を考え、県内（主に県央・県西地域）で受け入れることを決定しました。

疎開先での子どもたちは、教員の授業を受けたり、地元農家の作業を手伝うなどして過ごしました。

集団疎開に同行したある教員が津久井郡串川村（現・相模原市緑区）で活動した日々を振り返るには、子どもたちの食べ物は配給の事情で数か月同じものが続き、風呂は月一回、近隣住民の風呂を借りていましたが、のちにシラミが湧いたせいで露天風呂に交代で入ることになったとのことです。

こうした栄養不足や不衛生が原因で腫れ物ができる生徒が多く、配給のわずかな薬をわけて塗ってしのいでいたようでした。

終戦後も、横浜、川崎、横須賀の学校施設は空襲で焼失したり、米軍に接收されて使えないことがあり、なかなか帰れない子どもたちが大勢いました。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ